訪問

「戦後韓国と日本文化」を書いた　金成玟（キムソンミン）さん

拒否と受容の仕組みたどる

本書のカバーを飾るのは「鉄腕アトム」ではなく「宇宙少年アトム」。1970年代、韓国で放送されたときのタイトルだ。主題歌も韓国語で歌われ、アトムは韓国のロボットとされた。35年間に及ぶ植民地支配を受けた韓国では、日本の大衆文化が禁止されていたからだ。

しかし「見たい」「読みたい」「聴きたい」人々はいる。大衆の欲望が存在する。漫画や、アニメ、テレビ番組、ポップスなど多くの日本文化コンテンツが脚色、翻訳、修正を経て戦後の韓国社会で消費されてきた。海賊版も広く流布された。

「日本大衆文化禁止とはどういうものだったのか。ただのナショナリズムではない。いろいろな要素が複雑に作用した歴史的、文化的産物で、重層的に見ないと理解できないと思うのです」

日本の支配が終わると朝鮮半島は南北に分断され、南側は3年間の米軍政統治の後、大韓民国として独立。朝鮮戦争を経て冷戦の最前線で、軍出身大統領による独裁的な体制も経験した。同じ民族ながら「北」は明白な敵として位置づけられた。一方、冷戦体制下で同じ陣営の日本だが、わだかまりや嫌悪さえ否定できない対象だ。

「でも、それだけでもない。複雑でアンビバレントな感情。日本にもそれは、例えばアメリカに対してありますよね」

拒否しながら、受け入れる。受け入れつつ、認めない。そういう「否認のメカニズム」が本書のキーワードだ。そのメカニズム作動の半世紀を、具体的に検証していく。

禁止といっても、実は法令上で日本を名指ししたものはなかった。禁止の実効は、制度的には検閲で具体化され、メディアに現れるナショナリズム的言論に表れ、個人レベルでは「日本文化が好き」とは言いにくい抑制として作動した。

「そういう意味では、法的に示さなくても、集団的社会的なものとして禁止を維持させることができたのですね」

90年代後半からは禁止も徐々に解かれ、2004年には映画も全面的に開放された。しかし今は、日韓間にとげとげしい雰囲気が漂う。「個人として何ができるか。やはり自分の好きな文化を享受し、話し合うことからだと思うんですよ。空気を読まない。あえて気にしないことかな」

ソウル大言論情報学科で修士課程に進み、東大大学院を経て、現在は北大大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。「日本社会のことについても書いていきたいですね。道民として」

編集委員　関正喜

岩波書店　2376円

(C) 北海道新聞社　無断転載、複製および頒布は禁止します。
関　正喜　2014/12/22 15:32:14